

序論

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールはチームスポーツ種目に属し、国際的な統一ルールに従い2チームによって行われる。定められた競技時間内にあげた得点の多いチームが勝者となる。筆者は高校からハンドボールを始め、主にサイドポジションを中心にプレーしてきた。サイドプレーヤーがオフェンスに参加するためにはシュートをするだけではなく、いつでもボールをもらえる位置取りや自分からもらいに行くような動きが必要になってくる。これはチーム全体のシステム的なものではなく、個人の動き方や位置取りである。つまり、ボールを持たない場面でのサイドシュートへ向かうための位置取りの研究をしたいと考えたのが動機である。

本研究の目的は、ハンドボール競技におけるサイドシュートの位置取りについて、実際のゲームでのサイドシュートに至るまでの運動の組み合わせの構造を明らかにしながら、その分類を試みることである。研究方法は、マイネル (K.Meinel) の運動学における運動モルフォロジー的考察法を用いる。その際にサイドシュートのシュート場面をビデオ編集し、フィルムを用いて印象分析を行うことで、運動を間主観的に捉えるものとする。研究対象は高松宮記念杯男子第57回平成26年度全日本学生ハンドボール選手権大会におけるベスト8以上の7試合の200場面を原資料とし、分析・考察を行うこととする。

本論

第一章 ボールゲームとしてのハンドボールの構造特性

ここでは、ボールゲームとしてのハンドボールの構造特性についてまとめた上で、サイドプレーヤーの特性およびハンドボールの戦術概念について述べる。ハンドボール競技のゲームの活動目標は、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れること、また自分のゴールを相手の攻撃から防御することにある。攻撃におけるサイドシュートのそれぞれの位置取りの動きはさまざまな構造的な特性をもっているが、それらは密接に関わってサイドシュートの全体を形成している。よって、どの動きの局面も不可欠なのである。

第二章 ゲームの運動観察法

ここでは、ゲームの観察法としてマイネルの運動モルフォロジー的考察法を用いる。フィルム・ビデオを用いて観察し考察するが、その際、他者観察の不可欠な前提条件となる印象分析を行い、運動経過を間主観的に捉え、運動共感できるようにする。時には、あたかも実際に自分が動いているかのように観察する。また、サイドシュートの構造を把握するためにはマイネルの8つの運動カテゴリーのうち、特に「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」、「運動の正確さ」の4つが有効な視点であると考えたため、これらを用いて分析・考察を進めた。さらに印象分析の際には、より間主観的に運動観察を行うために「共同観察」により研究を進めた。

第三章 ゲームにおけるサイドシュートの位置取りの分類

この章では、高松宮記念杯男子第57回平成26年度全日本学生ハンドボール選手権大会のゲームにおけるサイドシュート場面を抽出し、それらの印象分析と結果の考察を行う中で、カテゴリー的な把握を通じて分類を試みた。その結果7つの典型例を呈示することができた。

表：分類した典型例

(1)「ローポジション走り込み型」	サイドシュートにおける、一般的な位置取りからのシュートへの入り方であると考えられる。45°からのパスを受け、助走のスピードを保ちながらジャンプへ向かうことができるため、多くのプレーヤーがこの位置取りをしていることが多い。
(2)「ローポジション調節走型」	パスが来るタイミングやパスコースが曖昧な際に調節しながらボールをキャッチするものである。この典型例は、ボールを確実にキープするために、助走ラインとは外れて調節しているものである。
(3)「ミドルポジション走り込み型」	「ローポジション走り込み型」とほぼ同様な運動の構造をしている。違いとしては、9m付近の位置から助走をつけることで大きくシュートへの角度が取ることができることである。
(4)「ミドルポジションバックステップ型」	ボールをもらうまでの動きが「ローポジション走り込み型」とは違い、9m付近から後退しながらタイミングを調節し、助走に入っていく、というものである。
(5)「ハイポジション調節走型」	9mよりも上からサイドステップを踏みながらパスをもらうタイミングを調節していくものである。静止して助走に入るよりも、スムーズな切り替えが可能な入り方である。
(6)「ハイポジション切り返し型」	一度9mよりも上に走り、反転してDFをあざむくものである。切り返しをすると同時にキャッチを行い、助走を開始している。
(7)「ハイポジション走り込み型」	9mよりも上に位置取り、外側から走り込んでシュートへ向かうものである。また、サイドステップで調節しながらパスを待ち、助走に入るというものである。

結論

本研究では、サイドシュートの位置取りの構造について運動モルフォロジー視点から質的に明らかにすることによって、7つに分類することができた。これらの新しい典型例では、どの局面を見ても、各局面の一つ一つが密接に関わり合い、シュートの入りにはどれも欠かせないものであるといえる。以上のようにサイドシュートの位置取りの構造を検討することで、多くの「引き出し」があることをうかがい知ることができた。「引き出し」を多く持つことは、自己のプレーの幅をひろげることにつながり、シュートの入りに大きく関係するものである。その「引き出し」を実際のゲームの中で使うためにも、日々の練習において正しい運動を身に付け、実践することが必要なのである。何故ならばゲームの最中には、数ある選択肢の中から行動を即座に選ぶ必要があり、それらの動きは自動化されているからである。今後の課題として、運動学的視点から、確固とした指導体系を模索することを挙げたい。(引用・参考文献省略)